

## 口永良部島における人の移動

田島康弘

鹿児島大学多島圏研究センター学外協力研究員

### Immigration and Emigration in Kutinoerabujima, Kagoshima Prefecture

TAJIMA Yasuhiro

Corporate Researcher, Research Center for the Pacific Island, Kagoshima University

**要旨：**口永良部島における人口移動、及び離島者の動向について実態を把握、整理し、考察を行った結果、以下のことが分かった。

- 1) 来島時期は、明治期以前、明治期、戦後の開拓期、近年のIターン期の4期に区分できること。
- 2) 主に1960年代に、大規模な人口流出により人口が激減したこと。
- 3) 島民は「教育振興推進協議会」を作って、人口減少の歯止めを努めていること。
- 4) 離島者の行先は鹿児島市と大阪市の2か所が多いこと。
- 5) 出郷者の間では3つの同郷集団が作られ、それぞれ独自の活動を行ったこと。などである。

**Abstract:** This study aims to grasp the immigration and emigration movement in Kutinoerabujima and to make clear the tendency and characteristics of these phenomena. The author visited this island, gathered related materials and interviewed some islanders. Interviews were carried with the emigrants living in Kagoshima city also. The following conclusions are drawn:

- 1) There are four immigration periods in this island, pre-Meiji era, Meiji era, after the World War II era and the recent immigration era.
- 2) The biggest emigration movement happened in 1960's.
- 3) Islanders organized an association to discuss and realize the growth of the students and to attempt to stop the decline of the population.
- 4) Most emigrants live nowadays in two cities, Kagoshima-city and Ōsaka-city mainly.
- 5) Three social groups were organized among emigrants in Kagoshima-city and their original activities were created by each group.

#### 1 研究目的

本研究は口永良部島における人の移動・移住状況について調査、整理し、そこから見えてくることについて考察しようとしたものである。

筆者は人文地理学、社会地理学の立場から、こうした人の移動現象やそれと社会との

かわりに興味を持ち、これまで主に奄美の人々の移動やこれと社会とのかかわりについて調査、考察し、報告してきた。

今回、口永良部島での共同研究に参加する機会を得て、従来からのテーマをさらに深めようと考え、既存の諸文献の整理、現地口永良部島での調査・聴き取り、訪島前後での鹿児島市における聴き取り調査などを行ってきた。

本報告は、こうして集められた資料や調査の結果を整理し、若干の考察を行ったものである。出身者の大阪での状況など、不十分な部分も多々あるが、現時点で分かったことを整理することも一定の意味を持つと考え、報告を行うものである。

## 2 来島者の時期区分

主に諸文献の整理から、口永良部島への入島者の時期は次の四つの時期に分けることができるものと思われる。すなわち第1期 明治期以前、第2期 明治期、第3期 戦後の開拓期、第4期 近年のIターン者の時期。以下、これらの内容について見ていきたい。

### 第1期 明治期以前

「この島に伝わっている最古の物語は、流亡した平家一族がこの島に逃れてきたという話である。」<sup>1</sup>と言われ、平家の落人伝説がある。

この落人伝説はさらに「治永8年源平戦ののち平家の落人が元村（今の神田方面）に居住し天保の噴火後現在の本村を形成したと伝えられている。」<sup>2</sup>とあり、これが今の本村の起源とされている。治永8年は西暦1184年であり、また天保の噴火は1841年である。

しかし、これ以前にも「日本史の上にこの島が浮かび上がってくる前から、少なくとも人類がこの島に生活していたであろうことは、先住民の遺跡地が湯向、寝待、本村、前田の4部落で発見されているところからほぼ確実である。」<sup>3</sup>とされており、かなり以前から人びとが住んでいたようである。

### 第2期 明治期

この時期は新村、湯向、向江浜、田代の各地区に新たな居住者が住み着いた時期である。

新村は1872年（明治5）島津又七（日置永吉）が谷山、国分の7戸11名と共に入植した所で、いずれも県本土からの入植者であった。

湯向には1883年（明治16）県本土から士族の2人が入植し、牧羊を始めた。その後、1898年（明治31）大島郡笠利の11戸が諏訪之瀬島を経て湯向に住み着き、2人のもとで働いたと言われる。2人の士族の姓はその後消え、湯向は笠利出身者によって構成されてきている集落である。

向江浜は1885年（明治18）枕崎や坊の漁業者が当時盛んであったカツオ漁で島の沿海部を訪れ、その漁獲、加工等で住み着き、形成された集落であり、県本土からの入植である。

田代は1904年（明治37）「加世田から山師としてきた人達がこの地に住むようになり、集落が形成され始めた。」<sup>4</sup>とあり、県本土からの入植である。

以上が明治期の入島者の内容であり、本村以外にいくつかの新たな（と思われる）集落が形成されたこと、また、その多くが県本土からの入島者であったのに対し、湯向だけは大島郡からの入島者であったことなどが分かった。

さらに、その数については良くは分からないが、新村が7戸、湯向が13戸で合わせて20戸であり、これに向江浜と田代が加わることになる。

なお、向江浜については1919年（大正8）の向江浜の世帯数が71世帯との資料があり<sup>5</sup>、

この数値から考えると、明治期にも相当多くの世帯が存在したことが推測され、明治期の入島者の総数も数十世帯（50世帯以上）になることが推測される。

### 第3期 戦後の開拓期

この時期には主に島の北東部で多くの入植者が見られた。その集落は永迫、白辻、寝待、田代などである。このうち永迫と白辻はその後全世帯が離村し、集落が消滅している。

永迫は1949年（昭和24）「大島出身の引揚者が中心となり、15戸69名が永迫地区に開墾を開始し、昭和27年には23戸に増加した。」<sup>6</sup>のであったが、その後1961年（昭和36）頃から「開拓地を離れる人が続出し、昭和39年には6戸を残して関西方面へ流出し、昭和42年には全員引き揚げ、20年間の開拓史にピリオドを打ち、廃村となった。」<sup>7</sup>のである。

白辻については集落としての独自の記述はなかったが、湯向の記述の中に白辻に関する次のような記述がある。1960年（昭和35）には「湯向地区人口130名、永迫地区44名、寝待地区20名、白辻地区28名、計222名と記録に残っている。」<sup>8</sup>と。これにより、白辻は永迫の3分の2程の規模であったことが推測されよう。

寝待については1950年（昭和25）頃「開拓団が入り多いときには16戸60余名の入植者があったが、永迫地区などよりも早く全員流出してしまい」<sup>9</sup>とあり、その入植規模は永迫と同じ程度かやや小さいものであったと思われる。

田代については1949～50年頃「他の地区と共に開拓団が組織されて大きく変化したが」<sup>10</sup>とあり、開拓団が入ったことは記されているが、その規模については不明である。

以上を合わせると、永迫が23戸、白辻は約15戸、寝待が16戸であり、以上で54戸となつて田代は分からないが、合わせて60戸以上が入植したと推測できるであろう<sup>11</sup>。

この地区へのこうした入植者の増大により、1949年湯向に金岳小学校の湯向分校が開設されている<sup>12</sup>。

なお、これらの開拓者がどこから来たかについては、永迫の「大島出身の引揚者が中心」という記述以外は不明である。

### 第4期 近年のIターン者の時期

近年の入島者と一般的に言えば、Uターン者もこれに含まれるであろう。しかし、ここではUターン者については除外する。というのは島のほとんどの者が一度は島を出ており、これを含めると、ほぼ全員がUターン者すなわち入島者になってしまうからである。従って、ここでは近年の入島者としては、Uターン者は除き、Iターン者のみに限定する。

Iターン者に関しては、概要の聴き取りを行った程度で、個別の十分な調査を今回は行うことができなかったが、聴き取りと既存の資料などを整理した結果、次のことが言えるように思う。

まず、入島者の規模については、最近10年間の入島者世帯総数は10世帯程度であり、第2期や第3期の入島者の規模と比べると、かなり小さいものであること。

次に、入島の仕方が集団的ではなく個別分散的であり、また世帯単位が多いが、単身者もいること。

さらに、定着して住み続ける者がいる半面、短期間で島を離れる者も目立つことなど、必ずしも安定的ではないこと。などである。

また、彼らがどこから来たのかについては断片的な聴き取りから判断すると、特定の地域はなく、日本各地でバラバラであり、分散的である。

### 3 島の人口減少と離島者の増大

ここでは、第2章の第3期で見た戦後の開拓民の集団的な入島などにより増加した人口が、その後次々と島を離れて行った状況を、統計数値を通して見ておきたい。

開拓集落の永迫については先に見たとおり、1961年（昭和36）頃から「開拓地を離れる人が続出し、昭和39年には6戸を残して関西方面へ流出し、昭和42年には全員引き揚げ、20年間の開拓史にピリオドを打ち、廃村となった。」のであったが、こうした状況が開拓集落だけではなかったことは、後に見る集落別人口の推移などからも推測できるであろう。

島全体の1950年以降の人口の推移をみると、55年をピークにしてその後の70年までの15年間に急激な人口の減少が見られる。永迫の記述では1961年頃からとあるが、寝待の記述のところでは「永迫地区などよりも早く全員流出してしまい…」とあり、島全体の統計からは1961年よりもっと早くから人口流出が起こっていたことが示されている。寝待に示されているように、戦後の開拓集落における入植者の流出が最初に起こったことが考えられる。（図1）

1970年以降も人口の流出は続いており、以前の時期ほどの量ではないが、こうした減少傾向が現在でも止まっていないことが、図では示されている。

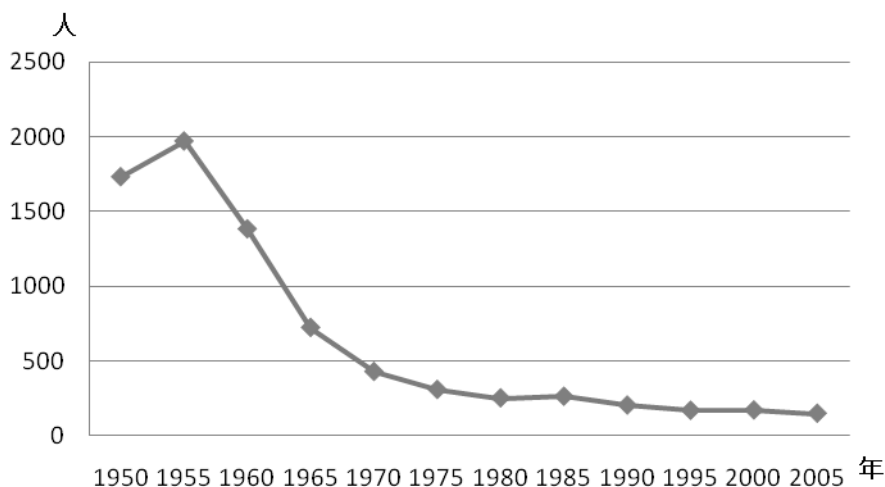


図1 口永良部島の人口の推移

世帯数の推移の図も作成したが、1980年から85年の間に多少増加している他は人口の推移とほぼ同様の傾向と言えよう。（図2）

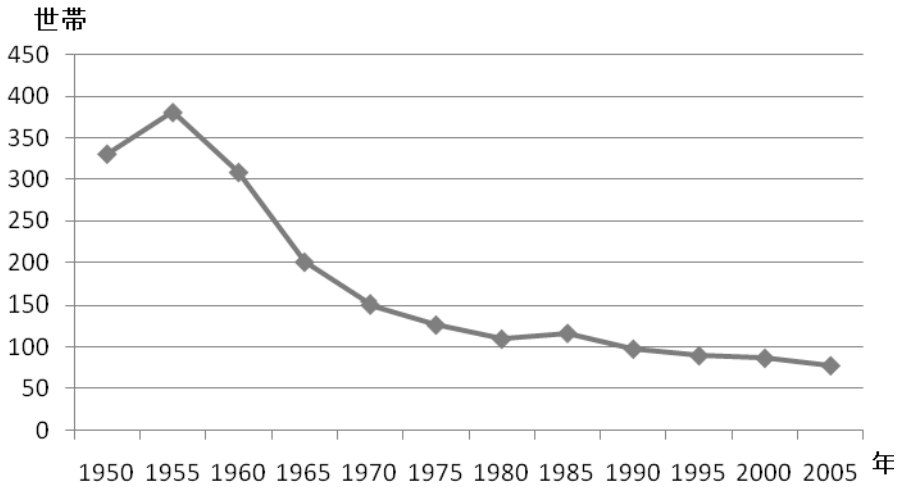


図2 口永良部島の世帯数の推移

次に、以上の動向を集落別に見た。まず人口の推移をみると、島全体では大きく減少していた1955年から60年の間で、どの集落もそれほど人口が減っておらず、島全体の傾向と異なっていることが目につく。それはこの図では、先の戦後の開拓集落などの消滅した集落が、除かれているからである。逆に言うと、島全体の図には消滅集落が含まれており、それらの集落のこの間の減少が、急激な減少として示されていたのである。(図3)

これに対し、1960年から65年の間の急激な人口減少が目立っている。この減少率は30～40%台の集落が多い中で、とくに向江浜では223人から36人へと16.1%にまで減少している。65年から70年の間も前の期間に次ぐ減少が見られ、その後も減少傾向が続いているが、その率は次第に小さくなっている。

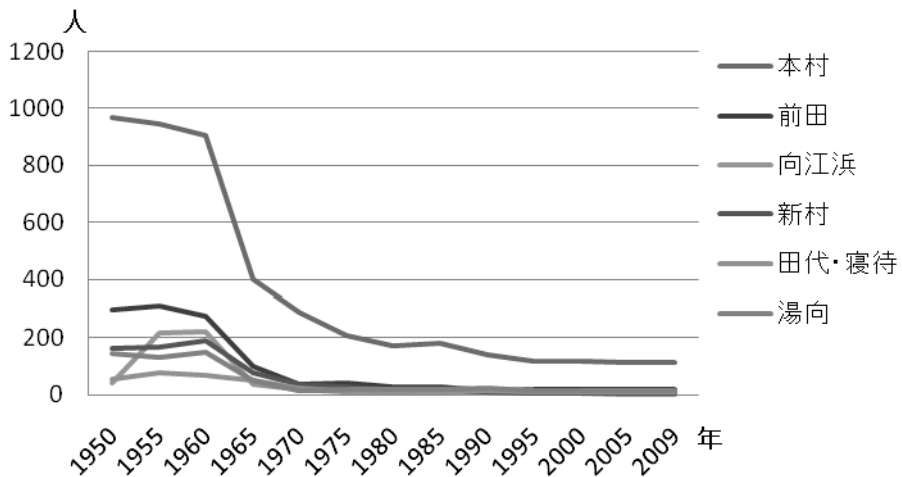


図3 集落別人口の推移

なお、向江浜の1950年から55年の急増と1960年から65年の急減の理由は1951年（昭和26）「向江浜沖の第4種漁港改修工事が始まると安定してきたが、昭和34年、工事が終わると共に人口は激減し、活気を失った」<sup>13</sup>ことによるようである。

集落別世帯数の推移の図も作成したが、人口の図とほぼ同様の傾向と言えよう。なお、どちらの図も田代と寝待は距離も近く、また数も少ないので一緒にして扱った。（図4）

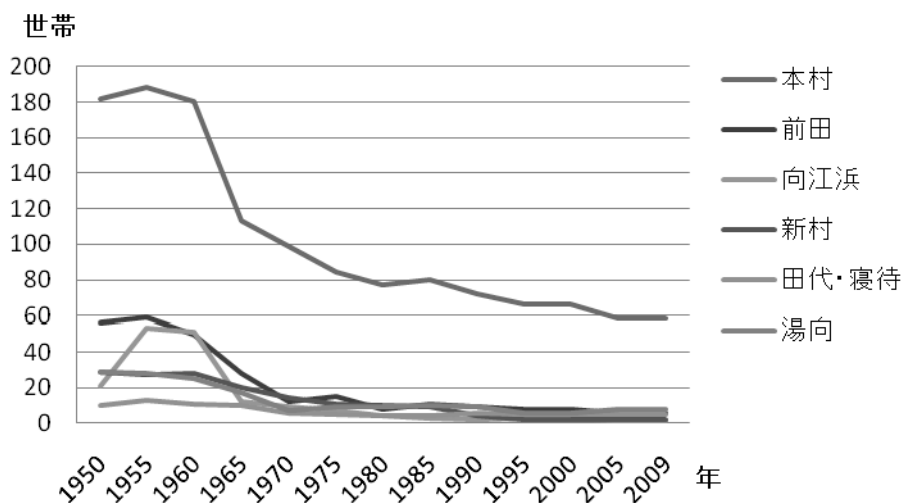


図4 集落別世帯数の推移

#### 4 児童・生徒数の減少と「留学生」の動向

次に、島の人口減少、島外流出の動きを、小中学校の児童・生徒数という別の資料、別の側面から捉えて見たい。それは、より詳細なデータが得られ、従ってより詳しい検討が可能となることの他、ここには人口減少の動きを何とかして食い止めたいという島民の願いをも窺い知ることができるからである。

まず、金岳小学校の児童数の推移をみると、1959年をピークに1960年代に急減しており、先に見た人口や世帯数の減少傾向とほぼ対応していると言えよう。1970年以降もほぼ同様の傾向が示されていると言えようが、こちらの図は5年単位ではなく1年単位の数値が示されており、より詳細な傾向が分かる。（図5）

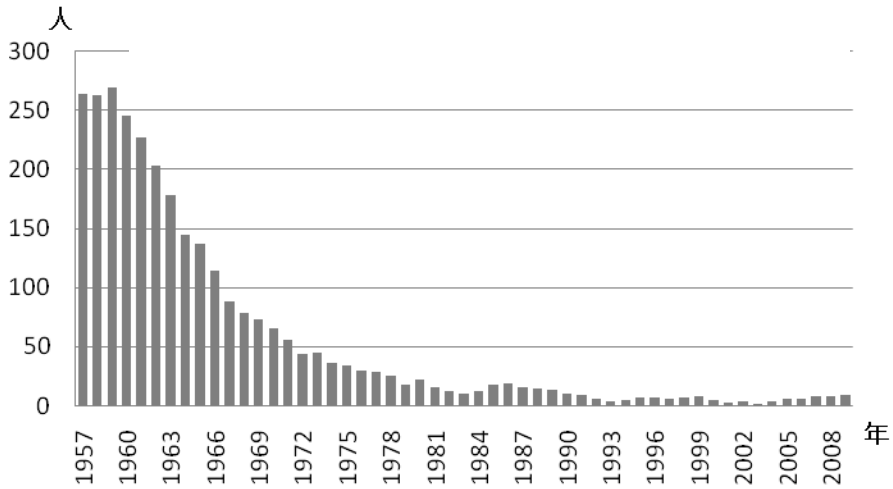


図5 金岳小学校児童数の推移

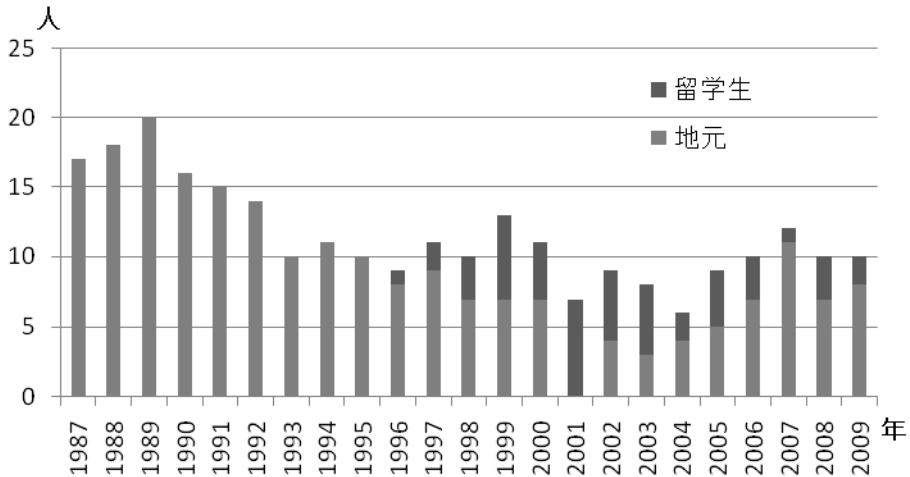


図6 近年の児童・生徒数の推移

そこでこの数値を使って、近年すなわち1987年以降の児童・生徒数の動きを見ると、年による増減がかなりあること、1996年以降は「留学生」が加わっていること、地元の子供については2000年までは次第に少なくなり、2001年には地元の小中学生は0人と1人もいなくなったこと、しかし、2002年以降は地元の小中学生が増える傾向にあること、などのことが分かる。(図6)

そこで次に、この「留学生」について検討しておきたい<sup>14</sup>。口永良部島におけるこの留学制度の正式名称は「(緑の火山島)南海ひょうたん島留学」と言い、県が行っている「山海留学生」制度の一環であるが、地元の小・中学校が島外の子供を、原則として1年間受け入れ、入ってきた留学生は島内で生活し、島内の子供達と学校で一緒に学ぶというもので、この1年間という留学期間は延長することも可能とされている<sup>15</sup>。

口永良部島では1996年からこの制度による受け入れを始めたが、それ以降の受け入れ実績をみると、2001年をピークにして、それまでは受け入れ留学生数は増えていたが、それ以後は減少傾向にあることが分かる。また、小学生と中学生を比べると、延べ人数では小学生20人に対し、中学生28人で中学生の方が多くなっている。(図7)

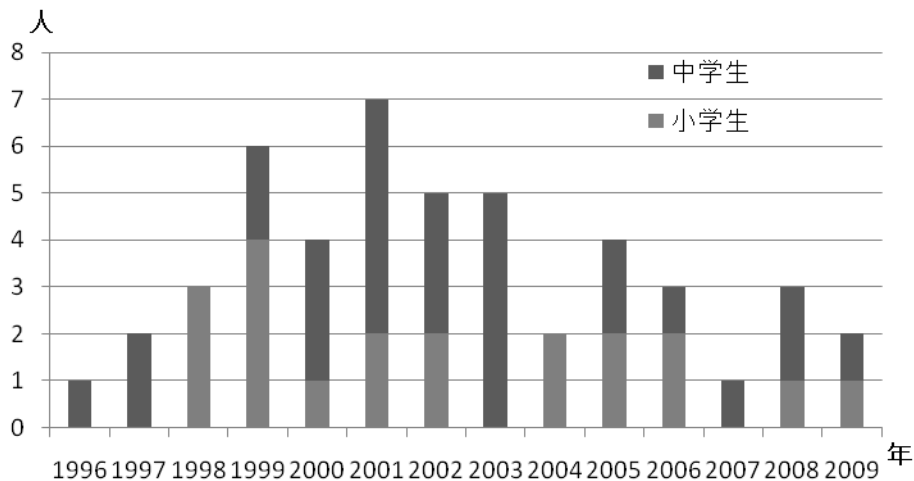


図7 留学生の受け入れ実績

次に、彼らの島での生活を支えている「里親」の実態についてみると、親とくに母親が子供と共に島に移り住むケースが半数近くを占めていて最も多い。これに親戚とくに祖父の下で生活するケースを加えた3分の2近くは、他人の下での生活ではないケースと言えよう。「その他の受け入れ家庭」の中身は区長など島の役職層やリーダー層が多いようで、立場上、責任上役目を果たしているということなのかもしれないが、こうした「他人」の下での生活の方がより本来的な留学であって、その期待される効果がより大きいのかかもしれない。なお、留学生の出身地は距離的に近い九州が多くなっているが、これ以外では関東や関西などもあり、特定の傾向は見られない。(表1)(表2)

ところで、こうした留学生は島とつながりのある家庭から来ているのであろうか。これに関する調査は十分にはできなかったが、留学生募集の1つの方法として、口永良部島の「教育振興推進協議会」が出身者に対して個別にこの情報を知らせていることから、出身者の姉弟が多いということが十分予想される。ただ、聴き取りから「出身者でない子も来ている」との答えも受けており、インターネットなどを通して情報を知り、応募してくる世帯もあるようで、詳細は不明である。



表1 里親の種類

| 種類        | 留学生数 | 割合    |
|-----------|------|-------|
| 母親（両親）が来住 | 13   | 48.1  |
| 祖父（親戚）が居住 | 4    | 14.8  |
| 小中学生を持つ家庭 | 2    | 7.4   |
| その他の受入れ家庭 | 8    | 29.6  |
| 計         | 27   | 100.0 |
| 不明        | 1    |       |
| 合計        | 28   |       |

表2 留学生の出身地

| 都府県  | 人数 | 割合    |
|------|----|-------|
| 鹿児島  | 6  | 30.0  |
| 福岡   | 6  | 30.0  |
| 関東諸県 | 5  | 25.0  |
| 大阪   | 2  | 10.0  |
| 長野   | 1  | 5.0   |
| 計    | 20 | 100.0 |
| 不明   | 8  |       |
| 合計   | 28 |       |

総じて、この留学制度は人口減少の大きな流れを変えるようなことはできないであろうが、これに取り組む人びとの努力によって、廃校の危機を救うなど一定の役割を果たしてきたことは確かであろう。

### 5 離島者と出郷者集団の形成

島を出た人はどこへ行ったのか。ここではこの問題を扱う。一般に、出郷者の行き先に関する正確な情報を得ることは不可能であり、よりましな方法を模索するしかない。この種のものとして、筆者の手元には出郷者の行き先に関する2つの資料がある。

その1つは1979年発行の「かながだけー金岳小百周年記念誌ー」である。この冊子の最後に「出郷者寄付者芳名」の部分があり、ここに373名の名前と住所が記入されている<sup>16</sup>。これから分かるように、ここに載っている人びとはあくまで百周年事業に賛同した「寄付者」のみであって、出郷者全員ではないということの注意が必要であるが、出身者の動向をある程度つかむことのできる貴重な資料と言えよう。

もう1つは、口永良部島の「教育振興推進協議会」が活用している名簿であり、116名の氏名と住所が記載されている。前述の「留学生」の募集要項や島の学校の情報などを出郷者に伝える際に使用しているもので、筆者は2009年5月、現住所の詳細な部分は伏せたうえで、関係者からこれを入手した。こちらは数が少なく住所も詳細なところは分からないが、前者に比べて新しいという長所がある。

ここでは双方とも資料を整理して結果を出し、両者を合わせて比較しつつ考察を行いたい<sup>17</sup>。

まず、出郷者の行先は九州と近畿の2か所で8割以上と大部分を占めている。ただ、2009年では九州はほとんど変わらないが、近畿の比重が下がり関東の比重が上がっている。(表3、表10)

表3 地方別人数 (1979)

| 地方  | 人数  | 割合    |
|-----|-----|-------|
| 九州  | 161 | 44.5  |
| 近畿  | 160 | 44.2  |
| 関東  | 27  | 7.5   |
| 中国  | 6   | 1.7   |
| 中部  | 6   | 1.7   |
| 北海道 | 2   | 0.6   |
| 計   | 362 | 100.0 |

表4 九州地方の県別人数

| 県   | 人数  | 割合    |
|-----|-----|-------|
| 鹿児島 | 132 | 82.0  |
| 福岡  | 23  | 14.3  |
| 宮崎  | 2   | 1.2   |
| 大分  | 1   | 0.6   |
| 熊本  | 1   | 0.6   |
| 佐賀  | 1   | 0.6   |
| 長崎  | 1   | 0.6   |
| 計   | 161 | 100.0 |

表5 近畿地方の府県別人数

| 府県  | 人数  | 割合    |
|-----|-----|-------|
| 大阪  | 127 | 79.4  |
| 兵庫  | 28  | 17.5  |
| 奈良  | 3   | 1.9   |
| 和歌山 | 2   | 1.3   |
| 計   | 160 | 100.0 |

表6 鹿児島県の市町別人数

| 市町     | 人数  | 割合    |
|--------|-----|-------|
| 鹿児島市   | 85  | 64.4  |
| 屋久島町   | 18  | 13.6  |
| 本土各市町  | 15  | 11.4  |
| 種子島各市町 | 8   | 6.1   |
| 奄美各市町  | 6   | 4.5   |
| 計      | 132 | 100.0 |

表7 大阪府の市町別人数

| 市町  | 人数  | 割合    |
|-----|-----|-------|
| 大阪市 | 66  | 52.0  |
| その他 | 61  | 48.0  |
| 計   | 127 | 100.0 |

表8 鹿児島市の町丁別人数

| 町丁    | 人数 | 割合    |
|-------|----|-------|
| 鴨池町   | 9  | 10.6  |
| 郡元町   | 6  | 7.1   |
| 谷山塩屋町 | 5  | 5.9   |
| 田上町   | 4  | 4.7   |
| その他   | 61 | 71.8  |
| 計     | 85 | 100.0 |

表9 大阪市の区別人数

| 区    | 人数 | 割合    |
|------|----|-------|
| 住之江区 | 23 | 34.8  |
| 西成区  | 18 | 27.3  |
| 城東区  | 5  | 7.6   |
| 浪速区  | 4  | 6.1   |
| 平野区  | 4  | 6.1   |
| 住吉区  | 3  | 4.5   |
| 東住吉区 | 3  | 4.5   |
| その他  | 6  | 9.1   |
| 計    | 66 | 100.0 |

次に九州の中をみると、鹿児島県が8割以上で圧倒的に多く、また、近畿では大阪府への集中度が8割近くと非常に高い。すなわち、鹿児島県と大阪府が移住先の2大集中地であることが分かった。(表4、表11および表5、表12)

そこで次に、鹿児島県内、大阪府内の状況を見ると、鹿児島県内では6割以上が鹿児島市、大阪府内では5割以上が大阪市であり、圧倒的とは言えないものの、一定の集中が見られると言えよう。鹿児島県内の残りは県本土の鹿児島市周辺市町が多く、また、大阪府内の残りは大阪市周辺の各市に分散している<sup>18</sup>。(表6、表13および表7)

さらに、1979年の資料から、鹿児島市内、大阪市内での集住状況を検討すると、鹿児島市の方は、鴨池町、郡元町地区に17.7%と多少の集中は見られるが、基本的には極めて分散的であるのに対し、大阪市の方は住之江区と西成区の二つで62.1%をも占めており、明らかに集住傾向が見られると言える。しかし、この理由については残念ながら不明である。(表8および表9)

表10 地方別人数 (2009)

| 地方 | 人数  | 割合    |
|----|-----|-------|
| 九州 | 51  | 44.0  |
| 近畿 | 43  | 37.1  |
| 関東 | 15  | 12.9  |
| 中国 | 4   | 3.4   |
| 中部 | 3   | 2.6   |
| 計  | 116 | 100.0 |

表11 九州地方の県別人数

| 県   | 人数 | 割合    |
|-----|----|-------|
| 鹿児島 | 47 | 92.2  |
| 宮崎  | 2  | 3.9   |
| 福岡  | 1  | 2.0   |
| 佐賀  | 1  | 2.0   |
| 計   | 51 | 100.0 |

表12 近畿地方の府県別人数

| 府県 | 人数 | 割合    |
|----|----|-------|
| 大阪 | 38 | 88.4  |
| 兵庫 | 3  | 7.0   |
| 京都 | 1  | 2.3   |
| 滋賀 | 1  | 2.3   |
| 計  | 43 | 100.0 |

表13 鹿児島県の市町別人数

| 市町    | 人数 | 割合    |
|-------|----|-------|
| 鹿児島市  | 29 | 61.7  |
| 本土各市町 | 10 | 21.3  |
| 屋久島町  | 6  | 12.8  |
| 龍郷町   | 2  | 4.3   |
| 計     | 47 | 100.0 |

次に、出郷者が作る会、同郷出身者の会について検討する。現在までに筆者が把握した出郷者の会は金岳会、新村会、へきんこ<sup>19</sup>会の三つであり、いずれも鹿児島市在住者を中心に結成されたものである。聴き取りによれば、大阪ではこうした会が作れなかったとの話である。また、金岳会が金岳小学校の同窓生からなる会<sup>20</sup>、すなわち島の出身者全体の会であるのに対し、新村会は新村集落の出身者で、また、へきんこ会は湯向集落の出身者で作られた集落単位の会である点が異なっている。

以下、それぞれの会について述べるが、主として金岳会と新村会の二つについて述べ、へきんこ会については十分な聴き取りができなかったので、分かっている範囲で簡単に述べることにする。

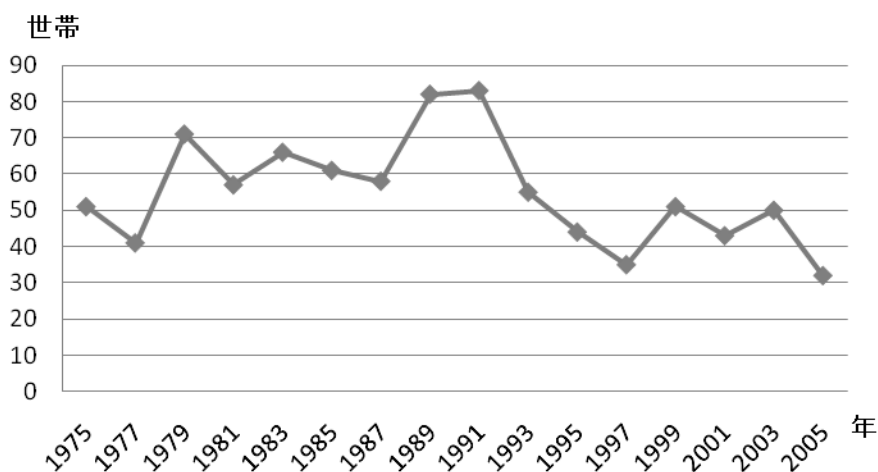


図8 会費納入世帯数の推移

金岳会の結成は1975年である。金岳小学校の児童数が最も多かった時期は1950年代であり、彼らが島を離れてしばらくの時間がたち生活が安定してきた者が多くなってきた時期に会が結成されたと言えようか。

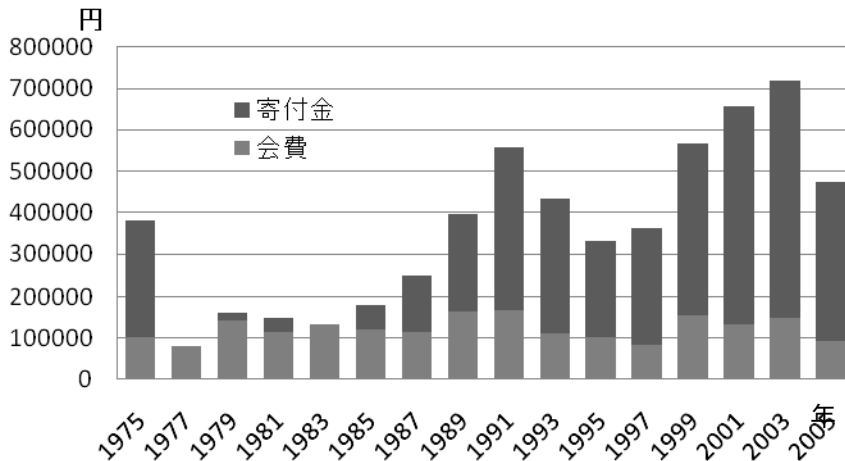


図9 会費と寄付金の割合の推移

会の主たる目的は親睦であり、このために会が行うこととして「1、会員の慰安、親睦会、2、会員に不幸があった場合は弔意の意を表す、」との文章が会則第4条に記されている。

この親睦会は1975年以降ほぼ2年に一度開催され30年間続いてきたが、2005年の「総会及び敬老会」を最後に、「人が集まらない」との理由で、以後は「やめよう」ということになったそうである。

30年間の会の活動についてもう少し見ると、会費は1世帯当たり2500円でその納入世帯数の推移をみると、1991年をピークにしてこれ以後は減ってきている。(図8)

また、会の運営は会費と寄付金で賄われてきたが、その割合の推移をみると、会費の割には寄付金の額が増えてきている。これは会の運営が寄付金に依存する度合いが次第に高くなってきて、寄付をする者の負担が大きくなってきたことを意味するものと思われる、これが会の中止につながる一因となったのかも知れない。(図9)

次に新村会について述べよう。新村は前述したように、1872年(明治5)県本土からの7戸11人によって開拓がはじまった集落で、最盛期の1956年には30戸189人に増えたが、その後、他の集落と同様に人口流出が続き、1970年には14戸38人、1990年には4戸8名、1992年には3戸6名となり、2009年の現在は2戸4名となっている。

こうした中で、新村会は1990年に「期せずして新村出身者の中から『祖先の功績とふるさとを偲ぶ親睦会を持とう』という声上がり、これが実現のため会員名簿の作成と新村の開村からの歴史を調べることに取り組み<sup>21</sup>始めたことが、会発足のきっかけのようだ。

会は、新村会会則の第13条に「この会則は平成2年6月17日から施行する。」とあるので、この日に会が発足したのであろう。会の目的は「会員相互の親睦」であり、このために「1. 会員の慰安親睦会 2. 会員に不幸があった場合は弔慰の意を表す」ことを行うという点は先の金岳会と同様である<sup>22</sup>。

大きく異なるのはこの新村会が「祖先の功績」を掲げている点であり、会は2年後の1992年、開村120周年を記念して、一大記念行事を行った。その中心は、ふるさと新村に開村120周年の記念碑を建立したことであろう。この記念碑の高さは2.25メートルで、桜みかげ石でできているものである。

この碑を建てることは、1990年の新村会設立総会で決議され、その後このための募金活動への取り組みが開始され、最終的には148人から約260万円が集められた。式典は1992年5月3日に行われ、この記念碑の除幕式と祝賀会がもたれ、鹿児島を中心に関西など各地から75名が参加したという。

これ以後の親村会の活動についてはよくわかっていないので、新村会については以上とする。

最後に、へきんこ会について簡単に述べておくと、第1回の会は1973年に持たれ、その後毎年1回の会を開催し2002年頃までこれを続けてきたが、2003年ごろからは中止されているようである。活動の内容は年に1回湯向に集まり、釣り大会を行うことが主であったようで、始めは鹿児島や大阪から40～50人が集まったが、次第に少なくなってきたという。

また、この会は会の機関紙とも言える、ふるさと新聞「へきんこ」を発行しており、創刊号は1972年で1996年7月に58号が発行され、60号の発行も確認しているが、これ以後については不明である。

以上みたように、湯向のへきんこ会の方が島全体の金岳会の設立よりも早いことから、このへきんこ会がこうした出身者の会の先導の役割や原動力の役割を果たしていたと言えるのかも知れない。

## 6 結語

結語として述べておきたいことの第1は、一般に人口移動現象はその時代の社会の動きに大きく左右されてきており、口永良部島への入島者についても大規模な入島者が見られた時期は明治期と戦後の時期であり、いずれも日本の社会が大きく変化した時期であったことが共通している。

社会が大きく変化した時期に大規模な入島者が見られたことになる。これが一般的な法則であるとすれば、今は人口減少の動きが進んでいるが、将来、社会が大きく変化する時期には、大規模な入島者が生まれることもありうるということになる。

現代社会は環境問題に直面しており、この問題に対する対応の1つとして自然回帰の動きが今よりもさらに強まることも十分に予想される。

第2に、以上のことも踏まえると、過疎化をさらに進めるのではなく、今現在の状況を可能な限り維持し、もちこたえることが大切である、と思われることである。この意味では、地元の人々が取り組んできた島外の子供を呼び寄せる留学制度などは、重要な取り組みであると位置づけられるであろう。同時に、島民の生活や福祉の向上、交通手段の改善なども大切なこととして位置づけられなければならないであろう。

これまでの社会の方向は、とくに過疎地と言われる地域において、そこにある地域資源を生かし活用することを、あまりにも軽視してきたのではなかろうか。この意味でも過疎地に進んで入っていくIターン者の分析などは、本稿では不十分であったが、本来はもっと重視して考察されねばならない研究対象と言えよう。

第3に、出郷者をどう見るかについて考えておく必要があるだろう。一般に、島を離れた彼らは時と共に島のことを忘れ、次第に離れていくという側面が一方ではある。しかし他方では、故郷あるいは祖先の出身地としていつまでもつながっているという側面もある。今大切なことは、島の将来あるいは当面のことを考えても、このつながっている

る方の側面を可能な限り生かすことではあるまいか。同窓会、郷友会あるいは単なる親戚に対する訪問や旅行などでも良いだろう。また、手紙、電話、メールなどの連絡だけでも良いかも知れない。こうしたつながりが将来生きてこないとも限らないし、島の経済の浮揚のために、こうしたつながりを生かしている例も少なくない。

以上の3点を最後に述べて結びとする。

### 謝辞

本研究を進めるにあたり、金岳小中学校校長の中園直也氏、屋久島町口永良部島出張所長の河東久志氏、教育推進振興協議会の石黒誠氏、湯向集落の山田ヨリ子氏、鹿児島市の元金岳会会長の羽生正一氏、錦江町の野元良一氏には、資料収集や関係者の紹介などで大変お世話になった。以上の方々に、厚く御礼申し上げます。

<sup>1</sup> 川越政則（1950）：南日本文化史

<sup>2</sup> 上屋久町口永良部島出張所（1993）：要覧くちえらぶ

<sup>3</sup> 注1と同じ

<sup>4</sup> 注2と同じ

<sup>5</sup> 金岳会（2005）：金岳会総会（30周年記念）。1919年（大正8）に向江浜は71世帯、407人とある。なお、田代は6世帯、29人となっている。

<sup>6</sup> 金岳小学校（1991）：金岳小学校体育館落成記念誌

<sup>7</sup> 注5と同じ

<sup>8</sup> 注2と同じ

<sup>9</sup> 注5と同じ

<sup>10</sup> 注5と同じ

<sup>11</sup> 人口は上記各集落の数値から戸数の約4倍と推測される。

<sup>12</sup> この分校は児童数の減少により、1969年に閉鎖された。

<sup>13</sup> 注6と同じ

<sup>14</sup> この制度の県全体の動向や笠沙町の実態については次の文献を参照。拙稿（2006）：自然に依拠した産業と地域の教育力 鹿児島大学教育学部研究紀要57巻

<sup>15</sup> 里親委託料として月に小学生は7万円、中学生は8万円が必要だが、町から1人当たり3万円の助成金がある。

<sup>16</sup> 行先不明者が11人おり、373からこの11人を引いた362人を総数として扱った。

<sup>17</sup> 表3～9は1979年の資料から、表10～13は2009年の資料からそれぞれ作成した。

<sup>18</sup> 2009年の方は詳細な住所が前述したように不明なため、同様の表を作ることはできなかった。

<sup>19</sup> 「へきんこ」とは島でよく釣れる小魚の名前（この地での呼び名）だという。

<sup>20</sup> すなわち金岳会は同窓会をも兼ねた会であると言える。

<sup>21</sup> 矢野義幸（1990）：新村の歴史 のあとがきによる。

<sup>22</sup> 新村開村百二十年記念事業推進委員会（1992）：新村の百二十年 新村会